市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付け 0797(32)1131
通巻35号 89／11 (1部100円) 市芦救援会 発行人 玉本 格

日程
第23回審理 1月10日(水) AM10～12 小林証人主尋問
第24回審理 2月3日(土) AM10～12 〃

■第二二回公開口頭審理

奨学金係をはずし、仕事をさせず 校長の意にそわぬ分会長は強配

市芦救援会事務局

去る一一月一四日、六三年三月の深沢先生の強配に関して、前田元市芦校長への最後の尋問が村田弁護士により行なわれました。証人はこれで最後と思ってか、従前にもまして「記憶にありません」を濫発して逃げきろうとしましたが、傍聴人の適確にして鋭い野次と弁護士の厳しい追及の前に、「市芦正常化」の異常ぶりを逆に次々と浮上させることになりました。

深沢先生を図書係に任命した件では、その理由はおろか仕事内容すらまともに答えられず、しかも奨学金係からはずしたことでは、従来の奨学生指導の一切をつぶしていったことが証言で明らかになりました。校長による校務分掌の任命制が、意に沿わぬ者の露骨な仕事はずしであり、また「教育改革」の生徒切り捨てを実行するものであることを明白にさせました。また、人事に関して深沢先生と同じ理科の教員の転出希望があり、処分者側として削減を実行できる条件があったにもかかわらず、あえて深沢先生を強配した事について何ら答えられず、当時分会長として「教育改革」反対の先頭に立っていた深沢先生への露骨な弾圧であることが明らかにされました。あわせて、次年度学校体制編成に際し、「教育改革」による学校混乱の実態を知りつつ何ら市教委とまともな協議一つしていないという校長の無責任ぶりも明らかにされました。

次回は七人の先生の強配に関する小林前管理部長の処分者側主尋問ですので、多様の方々の傍聴参加をお願いいたします。

も／く／じ

第22回公開口頭審理報告
校長の意にそわぬ者は、仕事を外し強制配転 …… 市芦救援会事務局 …… 2
分会長強配の露骨な意図が暴露されました …… 弁護士 村田 喬 …… 5
傍聴記 滝山先生になりすます …… 木下勝康 …… 6
第3回芦屋教育井戸端会議報告
「国際化」が切り捨てたもの …… 市芦救援会事務局 …… 7
芦屋市教委の「国際化」宣伝 …… 市芦救援会事務局 …… 15
「研修願」顛末記 …… 市芦分会 …… 16
かけがえのない一人として育ちあうこと …… 市芦分会 大角進一 …… 17
芦教組支部教研障害児部会資料 親も子もみんなが体当り …… 18
年末カンパのお願い …… 市芦救援会事務局 …… 22

■第二二回公開口頭審理報告

校長の意にそわぬ者は仕事を外し、強制配転

市芦救援会事務局

仕事外しに図書係を新設

村田弁護士（以下村田と略）
昭和六三年四月、深沢先生が配転された件について、配転される前の一年間のことで、六二年四月には六人の先生が配転され、校務分掌について従来は先生方が協議して決めていたのを、校長が一方的に決めたということでしたね。深沢さんはどういう地位にあったんですか。

前田証人（以下前田と略）
……図書係です。

村田　他にはどなたが。

前田　長瀬先生と司書の前田さん。

村田　前年までは図書係はありましたか。

前田　司書の前田さんだけでした。

村田　図書係というのはどういう仕事をする係としてあなたは任命したんですか。

前田　図書の選考、発注、生徒の利用状況等。

村田　新しくこの係をつくった理由は。

前田　……あの……図書の選定とか生徒に対する指導について、司書の先生から先生を配置してほしいとの要望もありましたので。

村田　六一年までは図書係としての先生がいなかったわけではないでしょう。

前田　……あの……主として司書の方が……

村田　甲第八四号証（六一年度校務分掌表）前年度、教務部の中に図書係がありますね。

前田　……はい。

村田　こういう校務分掌を承知の上で、六二年からあなたは新しい係をつくっている。教務部の図書係の仕事は。

前田　……記憶しておりません。

傍　ようそれで校務分掌決めたな！

前田　図書の選定とか、対生徒の調査等。

村田　特別、図書関係の仕事がふえそうだからといってつくったんではないんでしょう。

前田　はい。

村田　では何か仕事の具体的指示をしたのか。

前田　しておりません。

村田　深沢先生があなたに図書係の仕事内容を聞いたら、あなたは自分で考えろといったんじゃないですか。（爆笑）

前田　記憶にありません。

奨学金係をはずす

村田　深沢先生はその前年まで校務分掌上どのような仕事をしてましたか。

前田　あの……奨学金の係ではなかったかと思いますが、はっきりとはおぼえてません。

傍　ええかげんやのう。

村田　市芦の奨学金をとってる生徒の割合は。

前田　他校に比べると多いと思う。

村田　全体の二割位ですね。証人として記憶のある奨学金のとりくみは何かありませんか。

前田　……とくにありません。

村田　五六～七年にかけて、市教委が収入基準だけで五人の生徒を不採用にし、先生方から問題提起があっていろんな活動があったでしょう。内容について記憶ないですか。

前田　今のところわすれています。

傍　魂が入ってないからや！　魂が入った運動せいよ！

村田　あなたも奨学金に関与されるでしょう。

前田　校長の時に審査委員でした。

村田　どうして深沢先生を奨学金の係からはずしたんですか。

前田　校務分掌というのはいろんなところを

やってもらって、一人がずっと長くというのはよくないと……。

傍　おまえは管理職を長いことしとったやないか（爆笑）

奨学生指導を放棄

村田　深沢先生をはずした後、どなたが奨学金の係になったんですか。

前田　……記憶にありません。

傍　たかだか二年前のことやぞ！　自分が決めたんやろ！

村田　あなたもそれなりの理由があって新しい係をつくって任命したんでしょう。

前田　えーっと、各学年主任が……。

傍　知っとるやないか、とぼけんと最初から言え！　なんでも記憶にない言うて嘘つくな。

村田　木下、車谷、斉藤さんの三人ですね。学年主任が兼務する例はあるんですか。

前田　……なかったと思います。

村田　三人の先生は奨学金係の経験は。

前田　おそらくなかったと思います。

村田　たとえば毎月ひらかれてた奨学生集会はどうなりましたか。

前田　……えーっと、記憶にありませんが、回数がへって開かれてたと。

村田　あなたが指示したんじゃないですか。

前田　いえ知りません、いえ、しておりません。（爆笑）

村田　奨学金の支給方法について、六二年三月まではどんな方法でしたか。

前田　市教委から学校へ奨学金が振り込まれて、それを生徒にわたしていた。

村田　市教委からまとめて受領し、毎月わけてたという趣旨は。

前田　え――、奨学金の意義といいますか、それを認識した上で……。

村田　奨学金というのはお金を支給するだけのことではないと、いろんな話をして指導するということからでしょう。六二年四月から支給方法はどうなりましたか。年二回と聞いてますが。

前田　知りません。

傍　そしたら誰が決裁するんや！

村田　どこで決めるんですか。

前田　え――ちょっとわかりません。

傍　奨学金を何やと思てんねん！

村田　六三年四月以降は、あなたが辞めてからの支給方法はどうなったか知ってますか。

前田　いえ、知りません。

傍　指導部長やってて知らんのか！

村田　振り込みになったんですが、指導部長は関与しないんですか。

前田　支給方法までは……。

傍　奨学生指導の問題やないか！

「市芦正常化」に分会長は邪魔

村田　深沢先生は六二年当時分会長をしてましたが、深沢先生と意見を異にしたことが多くありましたか。

前田　はい、私共について、だいたい反対されたんではないかと（爆笑）。

傍　具体的に言うてみ！

村田　とくにどのような問題で対立があったんですか。

前田　とくにというわけでは……。

村田　すべてに反対であったと。

前田　おおかた（爆笑）そうであったと。

村田　六一年十月鈴木先生が配転、六二年三月六人の先生が配転された時、分会長でしたね。それに自分の停職処分の問題など、当然組合ははげしい抗議活動を行ったでしょう。

前田　はい。

村田　六二年四月以降、残った市芦の中で組合活動の中心はどなたということに。

前田　分会長です。

村田　六二年四月以降、校務分掌のやり方をかえたりして、あなたのいう「市芦の正常化」「教育改革」を実行してきたんでしょう。

前田　はい。

村田　あなたのやり方、見解にもっとも強く反対されたのは深沢先生でしょう。職員会議

のやり方もかえられましたが、正式に職員会議は何回か開かれましたか。

前田　え――開かれています。毎朝の職員会議を（爆笑）。

村田　職員朝会は何分ぐらいですか。

前田　五分ぐらいです（笑）

傍　それで会議いうんか！

前田　あの…カリキュラムを決める時とか…。

村田　朝会で最もよく発言してたのはどういう人ですか。

前田　それは私共の、教頭で（爆笑）。

村田　ほとんど校長や教頭がしゃべっていた会であることをあなたは認められたようなもんですが（爆笑）、先生方の中でどなたが一番発言してましたかという質問です。

前田　とくに記憶にありません。

傍　ワンパターンやなあ。

村田　六一年と六二年では、あなたにとってどちらの方が学校運営がやりやすかったですか。

前田　あの……どちらかということはない。

傍　それやったら改革になってへんやないか。

村田　従来のやり方から、校長指導型にかわったとあなたは証言してたでしょう。

前田　いえ、それは必ずしも……。

村田　では、六二年もあなたの意見に反対する人がいたということですね。

前田　あの……それは……いろんな意見を吐く人もいましたし……。

村田　六二年はあなたにとってやりやすくなったけれども、まだ反対する人がいて、その中の一人が深沢先生だったということですね。

一・一交流は破産

村田　六二年度人事異動のアンケートは。

前田　県立校への異動希望については口頭でとった。

村田　六一年度と同じですが、その理由は。

前田　市教委からいわれましたので。

村田　なぜ書面でとらないのですか、市の職員はとるでしょう。

前田　知りません。

村田　甲第八三号証（市職員の異動希望用紙）あなたのところにもきませんでしたか。

前田　……

村田　六三年四月の転出は、深沢さん、長瀬さん、他に斉藤さんが同じ理科で出ていますが、斉藤さんが出られるというのはいつ決まったのですか。

前田　三月二〇日から二八日の間。

村田　県の内示は三月二二か二三日でしょう。

前田　はい。

村田　市芦に来られたのは村上さん・社会科、免見さん・数学、岸本さん・理科で、魚見・岸本さんは新規採用ですね。

前田　はい。

村田　社会科では、鈴木・滝山・小川の三先生を配転しておいて、人を採用というのなら元の先生をもどせば良いでしょう。

前田　市教委が決めましたので。

村田　六三年四月の人事では、県と市の一・一交流になっていないのではないですか。

前田　それは…。

傍　一・一交流いうのはもう破産しとったやないか！　前の証言でもつぶれとる話や！

前田　斉藤さんが県へ出て、岸本さんが入ってきてこれが一・一交流で、魚見さんは県の方にいただいた。まだ残っていませんかということで。

村田　全体として一・一交流なのですか。

前田　ではありません。

村田　理科と国語が多いと、しかし理科の斉藤さんを出したらそれですむ話が、なぜ深沢さんを出したのか。

前田　人事ヒヤリングで人事交流すると……

学校混乱を不問・人事交流で強配

村田　六三年二月のヒヤリングで、人事の停滞があるという話でしたが、具体的な話は。

前田　一市一校ですから、人事交流をすすめていきたいという話でした。

村田　人事が停滞しているというがその説明

はあったのか。

前田　県の試験合格者が少いので。

村田　他の部署との交流ははじめてでしょう。

前田　たしかそうではなかったかと。

村田　従来、それで弊害があったのか。

前田　長い間いると、人事が停滞する。

村田　市教委のそういう方針に対してあなたの意見は述べたのですか。

前田　人事の停滞はそのとおりですが、教科のバランスをとってすすめてほしいと。

村田　校長としての意見はないのか、市芦の現状について。

前田　その時はとくにしてない。

村田　学校がどういう状態にあって、学校運営上どのような問題があるとかは。

前田　していない。

村田　六二年度、時間講師がすぐやめてしまうとか。

前田　時間講師については、そのつど市教委に報告しているので、二月のヒヤリングの時には出ていない。

村田　六二年度の混乱の反省の上にたって、基本的な論議はしなかったんですか。

前田　ない。

村田　生徒からも配転された先生をもどしてほしいといっていたことについても。

前田　……。

村田　三月二二日の人事ヒヤリングの話は。

前田　三月二〇日が入試の発表で、それに基づいて来年度のクラス数がわかるので、各教科の時間数を資料として作成して話した。

村田　この時も混乱の話などなかったのか。

前田　してない。

村田　斉藤さんが転出することはこの時は知らないんですか。

前田　三月二二日～二八日の間に聞いた。

申立人鈴木（以下鈴木）

後任人事については早い段階で市教委と一緒に県にいくのではないか。

前田　一二月、一月、二月です。

鈴木　県に対する希望をとって、市と話をして県へいく、その間の人事に関する意見交換はしてるでしょう。

前田　私が口頭で希望をとり、市に言ってる。

鈴木　どの教科のどの人が異動するか、三月二八日まで知らないというが、では後任人事についての具申、県への要望などないのか。

前田　ない。

審理報告

分会長強配の露骨な意図が暴露されました

弁護士　村田　喬

聞いておられた通り、無責任な話です。学校の混乱などまったく何も考えない、要するに学校から都合の悪い先生をいかに追い出すかということだけです。

校務分掌上も、翌年配転された深沢先生・長瀬先生を図書係という、今までになかった分掌につかせて、閑職というか仕事の内容のないポストを作ってそこにとばした。なおかつ、残った先生の中心であった深沢先生と話もしないと、自分の意見にことごとく反対していたということを認めているわけです。

要するに、校長や市教委にとって都合の悪い先生、先頭に立つのが深沢先生であったことが明らかになったと思うんです。その他にも校長の方針に反対していた先生がたくさん残ってがんばっておられたわけですが、その先生方も校務分掌上、閑職につかせた。

市教委と前田校長は、市芦を「改革」するという名目の下に、都合の悪い先生をどんどん配転していったということが明らかになり、露骨な意図があらわになっていると思います。

前田の反対尋問は終りましたが、次は小林前管理部長の尋問が続行されます。その中で、校長・市教委がこの弾圧の先頭に立ってきたということを明らかにしていきたいと思います。

傍聴記

滝山先生になりすます

木下　勝康

市芦公平委口頭審理を楽しみにしています。審理の無い月はどうも物足りない気がします。そこで傍聴をして思うことをあれこれ書いてみたいと思います。まず印象に残っているのは第一回の審理です。この時は、傍聴希望者が多数いたにもかかわらず、広い場所も確保せず勝手に人数制限をしておきながら当局の人間はちゃっかり先に座らせておくとは市民に対して失礼ではないかと思いました。そこでその事をひとこと抗議しようと傍聴券無しで会場にあがって行きました。会場入口には役所の人間が大勢長机の辺りに緊張した面もちでおり「名前を書け、傍聴券を見せろ」と無礼な対応でありました。しかしここで一喝すれば混乱を招くと思い大人しく「一市民がこの審理を傍聴しようとしているのになぜ入れないのか」などと問答していると、後ろの方から「こんなバリケード作ってどういうつもりや」と当局を追及する大きな声があちこちから起こり、騒然とした雰囲気になってきました。私は内心「えらいことになってきたなぁ、でもちょっと面白なってきたなぁ」と思いながら、のんびりと「なぜ傍聴券が無いと僕はここに入れないのか納得のいく説明をしてもらえませんか」などと礼儀正しくおちょくっていると急に「あっ！　滝山先生ですね。券がなくても結構です。どうぞ」とこちらの予想を越える急展開となりました。公衆の面前で相手の過ちを指摘して恥をかかすような悪い性格でないので、私はそのまま滝山先生になってすんなり公平審の部屋に入りました。

この第一回目で象徴された当局の市民敵視の姿勢はそれ以降も底流として流れています。たとえば十七回公平審で一九八七年三月の入試をめぐるこんなやりとりがありました。前田校長が合否判定委員会の開催場所・内容について証言を拒んだので、審査長が「場所を言えない理由はなんですか」と問うたところ、当局側が「場所を言うと、合否判定会議に市民が押しかける」と応じたのは市民敵視の端的な例です。自分たちが市民を裏切っているからこそわれわれを恐れなくてはならないのです。

傍聴を続けていて思うことの二つ目は、市芦の教師たちの仕事に対するひたむきさです。どんな細かい出来事も明確に覚えて証言できるのに感心してしまいます。これは毎日自分の魂を込めて生徒に接している何よりの証です。それに比べ前田元校長の証言のいい加減さはどうでしょう。「記憶にありません」を連発し、たまに答えてもうろ覚えのあいまいな答えしか返ってきません。自分の仕事にうちこんでいないから何も心に刻み込まれず、全てが曖昧な過去となっていくのでしょう。前田氏の姿と、市芦の教師たちの姿は実に見事な対比を見せていて、本当に働くとは何かと言うことを私に教えてくれます。

「市芦反弾圧闘争を支援する会」副会長の中川福督氏が公平委審理の後で前田氏のことを「ひょっとしたら昔、解放教育の研究集会にも時々来とった奴ちゃうか、ハイエナみたいなやっちゃなぁ」と憤慨していました。昔「生徒を臆面もなく切り捨ててきた犯罪性に私たちは今さらのように気付いたものでした」（十回生の進路文集・一九七三年）と書いてみせた前田和夫という人物に、この公平委審理は再犯の罪深さを思い知らせ、そのことで「教育の正常化」「教育改革」の中身を撃つ場になっていると思うのです。

さて、こんなことを書くとずいぶんまじめに公平委審理の傍聴に出かけているようですが、毎回いそいそと通うのは、傍聴席または申し立て人からのヤジがとても愉快だからです。活字にすると面白さが失せますが、会場をどっと沸かせるようなウィットの効いた一瞬の傑作を聞くのが楽しみで出かけているようなものです。

私はこの傍聴を重ねるにつれ、申し立て人の席に座っている人々が再び市芦の教壇に立つという確信を深めています。

■第三回芦屋教育井戸端会議　報告

「国際化」が切り捨てたもの

市芦救援会事務局

卒業生　崔（チェ）さんを迎えて

「国際化」を考える

今回の井戸端会議は、ほかの会議がふたつも重なってたが、「友達をひとりでもつれて来たいと思った」という心強い方もおられて、またひとつ輪の拡がりをみせた。

教育の「国際化」が叫ばれ、市芦の「国際高校化構想」のアドバルーンが上げられる中で、「国際化」とはいったい何なのかを考えてみることになり、チェさんに話を聞かせてもらった。

チェさんは、一九七二年に、市芦ではじめて本名を名乗って朝文研を発足させた人です。今は、在日朝鮮人を一人ひとり尋ね歩き、出会った朝鮮人のつながりのなかで祖国の統一と朝鮮の文化を考えていこうとしています。

そのチェさんに、最も身近な外国人である在日朝鮮人から見た日本の「国際化」について語ってもらいました。

「一九九一年問題」が緊急の課題

孫や子どもの在留資格が無くなる

《「国際化」ということがいわれだした背景には、日本の国際的地位の上昇、つまり経済力とそれに見合う影響力の拡大があります。軍事力、経済力、政治力といった力でもって自分の思い描いていることをゴリ押しするための国民的合意を組織するために、「国際化」という口当たりの良い言葉を流行させている。しかし、そうした力によって日本の地位が定められてはならないのです。

いま流行の「国際化」の概念の中には、日本人が本当に手を結びあわなければならない人々が不在なのです。韓国人（総称として）をはじめとする、アジア、第三世界の人々、あるいは先進世界内部における第三世界の人々がその視野の中にはいっていないのです。だから、ここでは「手を結びあう国際化」は、浮かび上がってきません。

なぜ、日本人は本当に手を結びあわなければならない人々と手を結べず、出会うことなくきてしまったのでしょうか。一九四五年は私たち韓国人にとっては、解放の年であったのですが、日本人は「天皇制」（王制）からの解放を実現したのでしょうか。一九四五年に、日本は根っこのところで何も変えることができなかったのです。

私のいまの最大の願いは祖国の統一であり、そのために闘うことです。一九五二年に祖国は分断されたのですが、「二つに分かれた」のではなく、「分断された」のです。その年、サンフランシスコ講和条約の発効によって朝鮮・韓国の国籍分断が行われ、その後、日本は韓国とだけ国交を回復し、分断に肩入れしてきたのです。日本は、植民地支配の正しい清算つまり、南北朝鮮はもちろんのこと、在サハリン・在日・在中国のすべての韓国人にたいして歴史的責任をとることなく、今日に至っているのです。

韓日条約は祖国分断への積極的な肩入れだけでなく、〈協定永住権をとってバラ色の人生〉という幻想を振りまき、いっそう在日韓国人を分断してきました。

そして、いま協定永住者の第三世代が在留資格を持たず、「密入国者」扱いにされる状況を迎えようとしています。これが、私たちの「一九九一年問題」なのです。協定永住者とは、植民地時代から日本に住む韓国人とそ

の子どもで、韓国と日本の間で結ばれた「在日韓国人の法的地位に関する協定」に基づいて永住権の申請をした韓国人です。その第三世代、つまり私の孫や現在十九才以下の青年の子どもは、日本に住む在留資格がないのです。在留資格のない外国人は「密入国者」として扱われることになるのです。「協定」では、一九九一年以降の問題については再協議する事になっていて、私たちにとってはこの問題が最大の焦点なのです。

韓日法的地位協定が、私たちにもたらすものが分断と追放と同化であるが故に鋭く反対しましたが、協定永住者の第三世代以降の処遇問題に限らず、あらためて正しい意味での在日韓国人に対する植民地支配の清算と安定した在留保障を求めます。日本にとって、それは日本の「国際化」の歪みを糾す一つの大きな契機となると思います。》

自分の中に残った「空白」を埋めるもの

「人口八万五千人の芦屋市の中に外国人は三八ケ国、一三一二人在住している。そのうち、七二一人（五五％）が朝鮮・韓国人であり、二一五人が中国人である。芦屋市行政のいう『国際化』の中にはアジアは存在していない。隣り合わせの外国人と当然のごとく人間としての関係を作ることができなければ、在日朝鮮人生徒との間で、教師と生徒の関係などありえなかったのが市芦だったのです」

「卒業後、かなりたって、ちょうど弾圧が開始され始めた頃だったのですが、居酒屋でチェ君とばったり出会いました。『おかげでいまも土方をしています』という彼が、朝鮮人の青年を数人つれて飲みにはいってきた。『見ず知らずの同胞の家を一軒々々尋ね歩いてる』ことを聞いたのもこのときだった。そのとき誘われるままに長田のマダン劇を見にいった。そこには、子どもから年寄りまで、朝鮮の祭の熱気があった」という感想に応えて、再びチェさんが発言した。

《マダン劇は、むかし韓国で抑圧された農民や労働者が、空き地や教会や工場の広場で権力者を風刺して演じ、時には笑い飛ばした劇です。それを僕たち在日の韓国人青年で演じたのです。

戸別訪問は、僕たちの人間的「生」を賭けたものです。僕はこれまで自分の持っていた文化、つまり民族や親を否定して生きてきました。まず僕がしなければならなかったのは、自分の文化を否定してきた自分を否定することでした。しかし、その後の自分の中には「空白」が生まれました。僕にとっては、その空白を生める作業が必要だったのです。そこからの作業が大切なのです。僕が張本（元プロ野球選手）に批判的なのは、彼は差別には負けなかったが、差別をなくす闘いをしなかったからです。「空白」の中には闘える何ものかをいれる必要があるのです。

僕は、みなさんを断罪する立場にはありません。僕にも国際化は必要です。みなさんにも国際化が必要です。僕がみなさんとどんな関係がもてるか、関係のつながり方、あり方を探り出すのは双方の協働作業だと思うのです。》

のびのび意見交換

チェさんの話を受けて、参加者から次々と感想・意見が出されていった。

「もう市芦を卒業してから十五年になる。チェがくると聞いて、来てみようと思った。市芦で僕がいちばん最初に考えさせられたことは、彼が自分が朝鮮人である。と意識して生きてきたというほどに、僕が市芦へいくまで自分が日本人だということを毎日意識して生きてきたかというと、そんなことはなかった。自分は何者や、自分が日本人ていうのはどういうことや、ということを考えさせられるようになったことです。一九九一年問題というのは、僕にとっては知らずに済ませればすむことが、朝鮮人、韓国人にとってみればものすごい大きな問題としてあるのに、僕らから全然見えていない」

「発育遅れの子がいるんですけど、いまいわゆる芦屋の『国際化』という名のもとで、やはりいちばん最初に切り捨てられるな、ということを感じているひとりです。差別ということでは、うちも障害児を抱えていますし、義務教育までは子どもも楽しく学校にいっているのですが、やっぱり差別と闘っていこうと思っても、結局大きくなって高校にいくときには差別で学校から切り捨てられる。そんな意味で、差別の中でどんな風に過ごしてきたのか具体的な話が聞きたいとおもった」

「私にとっては、また新しい問題で、頭が破裂するのではないか。私の目の前で、押したり引いたり、悩んだりしながら、というのを目のあたりに感じさせてもらうというのは初めてで、また、すごく自分の国を大事にして生きようとする人に直接ふれることも、今までになかったことです」

「ハンディのある息子を持っていますので、いろいろな会に出て勉強をしているところです。私は今そんなことで、話を聞いていまして、自分の祖国の文化を否定し、祖国を否定し、親まで否定しなければいけないような、そういう思いをしながらも、もっと大きなところで生きてこられた重みをずっしりと感じる。『国際化』とは何だろうなとあらためて思う」

「日本で生まれて、ずっといらっしゃる方に、子どもさんやお孫さんが生まれてくるときに、在留資格がないということを聞いてとてもショックだった」

「チェさんと同じ職場で、彼は僕の上司です。国労清算事業団の支援闘争のなかで救援会の滝山さんに出会って、市芦の闘いや市民の方の集まりの話を聞いて来させてもらった」という人々も加わって、井戸端会議はますます井戸端らしく成長しています。

のびのびした意見交換で、盛りだくさんの話が出されました。その一部は、後ろに独立させて掲載しました。最後を再びチェさんにまとめてもらい、第三回目の井戸端会議を終わりました。

生き方さえ間違えなければ手を握りあえる

《先ほどお母さんが、祖国の問題と比較して障害で悩む自分の問題を遠慮しておっしゃってましたが、そういうことはありません。僕は市芦時代も含めて、在日韓国人さらに北も南も含めたすべての朝鮮人は、アメリカのホームレスとか、貧困にあえいでいる黒人とか、パレスチナの難民とか、いろんな抑圧を受けているすべての人々の気持ちがわかるはずだという立場にたっていました。

しかしそれは、日本社会で差別を受ける側の人間だから、差別を受けている人間がわかるということではありません。自分を高みにおいたところで、自分だけは差別していないんだ、自分は安全だということではないと思うのです。

僕が日本の社会のなかで差別を受けて、そのあいだ育ってきて、現在も受けているでしょう。これからも当分の間、そういう社会が続くだろうと思うんですね。そういう中で、差別をなくするために、自分がどういう生き方を、歩み方をしていくかということで一生懸命がんばる人ならば、それは当然わかりあえる、手を握りあえると思うんです。

そういう意味で、悩みの水準の高い低いじゃなくて、本当に正しい悩み方をして、正しい解決方法を、人間ひとりでは無理ですから、まわりのいろんな人たちとともに考え、支え合いながら取り組んでいく、そういう態度を持っていれば決して水準の問題でも何でもないということを是非とも言いたかった。》

何のための「国際化」か

《まず、市芦では外国籍の生徒が六人いるらしいですが、そのことにふれて感じたことを少し話してみます。「国際化」というのは、別の表現をすると、今後日本が経済活動のためにどれだけ有能な商社マンを派遣することができるか、たとえば、東南アジアでどれだ

け人々からお金を搾り取ることができるか、要するに、経済効果・効率の問題だと考えられていると思います。今後、日本がもっとお金をもうけるために、有能な企業戦士、エリートを作り出すという実利面で言えばそれしか考えられていないだろうと思うんです。

そういう理屈で言えば、市芦の一学年四クラス、計一二クラスの中にいるたった六人に対してかける金と労力の、経済効率というのは本当に少ないと思うんです。当然六人に関しては、どんどん抑圧され、切り捨てられていくだろうと思うんです。現に押しつぶされていっていると思うんです。

二つ目に、経済効率という点からいうと、僕が朝文研を作ったときに、朝文研を支えていただいた先生方を含めて、当時の市芦が朝文研もしくは僕に対して投下した資本というのはかなりのもんだと思います。たとえば、HRで、僕を含む少人数のために市芦のカリキュラムが、その段階で、教育委員会が考えたカリキュラムではなかったはずです。経済的損失は大変なもんだったと思うんです。

しかし、経済効率でいったとしても、部落研があり、朝文研があり、その子らとつながろうとしていたいろんな人間がいた当時の市芦というのは、僕たちにとっての経済効率は本当に良かったと思います。

判断基準を、「企業戦士を作ること」ではなくて、「よりよい人間を作り、あわせてよりよい社会を作っていくこと」に置くとき、当時の市芦に投下された資本というのは、たいへん有用だったと思います。

そういうようなことでいうならば、この間の市芦の朝文研が、朝文研に集っている生徒達だけを担ったのではなくて、彼らがしっかりがんばって生きる姿にあわせてその周辺にいる生徒達も、なにがしかを考えていったと思うし、自分の生き方を考えていく契機を与えていたと思います。》

後戻りできぬ橋を渡って「サイ」から「チェ」へ

《三つめに、朝問研から朝文研に変えた話はすでにしましたが、その後、高校三年生の二学期以降、名前をサイからチェに変えました。サイからチェに変えるときはいきなりいましたが、そのときは本名宣言するときよりも勇気がいりました。というのは、サイというのは、どこか「日本」というものを引きずっています。僕たちはサイとは読まないですから、チェに変えるということは最後に残った橋を断ち切ってしまったということで、チェに変えるというのは本名を名乗ったときよりも、勇気というか、もう、後戻りできないという思いでした。

本名を名乗ったとしても高校を出ればそれまでですが、サイからチェに変えたということは、自分の生き方を自分なりに選択したということですから、そういう意味で、チェとして生きることによる不自由がもしあるとしたら、それをあえて受けよう、不自由を選ぶ自由というみたいなものですね。そのときに、僕は確実に一歩進んだと思います。

祖国分断の前にあえて立ち尽くす

《四点目に、テーマが「国際化」ということでしたけれども、朝鮮人は当初は朝鮮人で、植民地になって日本人となり、次に日本人と朝鮮人の併用、それから朝鮮と韓国に分かれました。

朝鮮と韓国に分かれたのは朝鮮半島が分断されたからだ、というのは間違いですね。国籍をいずれに選ぼうとも、それは、朝鮮半島をアメリカによって分断されてしまったということです。

また、日本にいる僕らは朝鮮籍を選んでもいい、韓国籍を選んでもいい。でも、韓国籍を選ばせるために協定永住権が存在し、当時、永住権をとれば国民健康保険にも入れるという政治的な勧誘があったと思う。（チェさんの一家は、健康保険加入の必要からお母さんとチェさんだけがやむなく協定永住権を申請。お父さんは拒否された）

日本の政府は、この間、僕たちに対して、人間としてやってはならないことをたくさんやっています。それに対して、僕は、相手がいくら人間としてやってはならないことをやったとしても、こちらは、人間としてしなければならないことをやって切り返すしかないと思います。これは僕の信条でもあります。

なすすべもなく立ち尽くすこともたくさんありますが、その傍らで立ち尽くしたいと思っています。立ち尽くす中で、なにか問題の解決の糸口なり、問題を解決できるまでに自分自身が高まることも可能性としてあるので、「なすすべもなく立ち尽くす自分」でありたいと思っています。

先ほどの法的地位でいえば、在日朝鮮人は当初「法一二六条該当者」という一つの国籍で、在留資格も在留期間も持っていなかったんです。あるはずがないんです。植民地時代に強制連行などでつれてこられましたから。だから、日本の法律の中では在留資格と在留期間を持たない人間というのは朝鮮人であり、韓国人であり、中国人であるわけです。これは何を意味するかというと、日本の国家の法律の中に、日本帝国主義の植民地支配の痕跡を残しているということです。この間、日本政府は、日本国家の法律の中のかつて日本帝国主義が行った植民地支配の痕跡をなくすために、いろんなことをやってきました。

その具体的な方法は、法的地位の細分化です。はじめたった一つだった法的地位が、今は五～六つあるのです。それほど分かれています。五人家族だったら、五人ともそれぞれまったく違う法的地位、在留資格、在留期間を持っているということで、これは家庭内のいざこざの原因になります。そのように法的地位が細分化されていると、在日朝鮮人が、ことあるごとに集まって団結しようということにならないんです。そして、一方では日本の法律の中から植民地支配の痕跡は消えています。

日本が「国際化」と声高に叫んでいる今も、このようなことが行われているし、来年一年間で正しい解決がされなければ、僕の孫、三世は在留資格がないという事態になっている。

「国際化」を切る場合に、いろんな視点があると思うんです。僕がこの場でいえるのは、かつての日本の過ちを繰り返さないためにも、異質のもの、自分達と違うものと同居することだけではなくて、本当に日本の社会を、世界をよくしていくために、文部省のいう「国際化」ではなくて、人を痛めつける理屈ではなくて、人とわかり合えるための国際化が今求められていると思います。

その具体的な契機、たとえばこの一九九一年問題を、つまり芦屋で、八万人の人口のうちの九〇〇人の人たちの生活あり方を決定づけることが来年一年間で決められようとしている中で、そのことを一つのテーマとして取り扱っていく中で、国際化ということを、自分の手と足と目と耳で作り上げていくしかないのではないかと思います。「国際化」という与えられた設計図はないんですから、試行錯誤しながら作っていくものでしょう。

最後に、まわりの先生方、まわりの生徒がいたからこそ僕は市芦の中でがんばることができましたから、逆にいうと、市芦の中にがんばる勢力が少ないとすれば、外にがんばる勢力があるんですから、余り愚痴をいわずに、もっと楽天的に頑張ってほしいと思います。

そういう国際化を、僕は自分の体すべてを使ったような地道な歩み方をやっていきたいなと思います。

労働者から見た「国際化」

芦屋の教育を考える市民の会

中村　猛

日本人にはアジアが見えていない

井戸端会議では「芦屋の教育を考える市民の会」ということで紹介を受けることになっていますが、僕は、全港湾建設支部の執行委員をしています。

この中で朝鮮民主主義人民共和国を訪問したのはぼくだけだろうと思いますが、行く方法には二つありまして、船で行くのと飛行機で行くのとですが、僕らは新潟から船で行きました。日本と共和国は国交がないので、ビザがおりません。そこで、中国へ行き、そこから共和国へはいるのですが、旅行社の人が先に北京へ行きまして、そこでビザをもらって帰ってくる。僕らは新潟で旅行社の人からビザを受け取って船に乗り、共和国に入ります。

その船が、最短距離で行けない。韓国がありますから、韓国の領海が通れない。だから、一回ぐるっと大まわりをして、三六時間。行くと、アメリカの偵察機がしょっちゅう通る。気色が悪いこと、おびただしい。

僕は、なんの因果かこの四月から管理職をやらされています。四月には、「課長と言われたら返事をしない」と宣言していたのですが、最近だんだん、「課長」と言われないと返事しない……。（爆笑）管理職だけを集めて研修がありました。研修というと、いつもはテーマや講師を教えてくれる。前の時は、京都大学の水野監督だというように。その日だけ講師もテーマも教えない　いったら差別問題、講師をみたら市民の会にも出てくれたことのある小林さん。やりにくいだろうと思ったけど、向こうはすごい肩書きもっておられて、彼の話は、「いわゆる部落問題、朝鮮問題は、部落や朝鮮に問題があるのではなくて、部落や朝鮮に接する自分達に問題があるという把え方をしてください。朝鮮の人と話をするときでも、朝鮮人にいろいろ問題があって、それが問題になっている、そうじゃないんでしょ、朝鮮人に接するわれわれに問題がある。そこを出してこないと何も解決できない。相手に変われということじゃない。というのが今の日本の差別に対する関わり方ではないかな」という話でして、なるほどもっともだなと。

「国際化」「国際化」と会社はすごくいう。「外国に出て、何か英語がしゃべれたら国際化」みたいな、英語と「国際化」とどういう関係があるのかよく分からないですが、市芦なんか英語がしゃべれたら「国際化」みたいな。T建設という会社が社員の一割を外国人にするという。その「国際化」の中には、一割の数の中にアジアは入っていない。「国際化」というとき、日本人にはアジアが見えていない気がしてならない。

日本人労働者からみた外国人労働者問題

僕は、全港湾の組合員ですが、全港湾の組合はおもしろいことをやります。私は建設支部なんですが、釜ケ崎の日雇い労働者を組織しています。

「国際化」というと、うちの世界では外国人労働者です。日本が豊かになるから外国人が入ってくる。外国人の権利を守れという形で、その問題がとらえられている。僕たちもそういう把え方をしかけてたんですが、最近ある日、新聞記事に出ました。うちの組合員ですが、外国人労働者と、朝、仕事の取り合いでどつきあいの喧嘩をした。外国人労働者の保護というけれど、本当に外国人労働者の保護でいいのか、要するに私たちの仲間の組合員にとっては、むちゃくちゃな敵なんです。自分の労働力をダンピングする。建設ブームで、土方で一万円です。彼らは、七千円、六千円。むちゃくちゃ足を引っ張られる。外国人労働者が単にかわいそうとかいう視点だけでとらえてはいけない。要するに、なぜ資本家が外国人労働者を使いたいかというと、日本人労働者は高いから、安い方を使おうとしている。日本人労働者が高いという言い方も間違いいうか、実は安いんですが、安けりゃなんでもやるということです。

そこで、外国人労働者の保護という形で、それだけでこの問題を見ていくと、なんか大きな間違いを犯すような気がしている。

構える教師と素朴な生徒

精中分会　西川澄子

私は茶道部の顧問をやってまして、その中に在日朝鮮人の子がいて、担任をしたことがないから、お父さんの話とか、国籍のこともきちっと分かっていないんですが、日本国籍やないという程度しか分かっていなくて、お正月に着物を着て初釜をしたときに、彼女が突然、「チマチョゴリを着たいねん」と皆がいる前で突然言い出して、そっから、「ソウルに早く帰りたいんだけど、お父さんが毎年毎年、ソウルに連れていくというのに、なかなか帰られへんねん」

「向こうで生まれたん」というと、「いや違うけど、やっぱり早く帰りたいねん」と、そういう話をすごく明るくする。その子と、そんな話全然したことがなくて、着物を私がきているのを見て、突然彼女がチマチョゴリ着たいと言い出した。私なんか、在日朝鮮人の問題にすごく重たくて、気をつこうて、ぐっと構えるばかりだったから、今も、平和教育とかやっててもを使っている。その子は、すっと言ってて、誰が聞いていてという感じでなくて、先生は日本人だから着物を着ている、うちは韓国、朝鮮人やからチマチョゴリを早く着たいと、素朴にいってくれた話を思いだした。その子とまたいろいろ話をしようと思ったら、すごく話がすきやという。担任していないけど、「いっぺんおうちにいってお父さんお母さんとはなしを聞きたいなあ」と言うと、「かまへんよ」いう。「担任の先生に断って、できたら行かしてもらうね」と言うと、「お父さんは話さへんけど、お母さんはよう話してくれるし、死んだおばあちゃんのこととか、ハンメいうてたんよ」、彼女ともう少し話をしたいなあと思いながら聞いていました。

まだまだ芦屋の教育捨てたもんじゃない

精小分会　森本

精道小学校は長いこと文部省の研究指定校になっていて、十二月一日に研究発表会がある。

僕はもともと岩園小学校にいて、それから精道小に行ったわけですが、行ったときにはすでに帰国子女を受け入れてまして、海外で過ごしていた子どもたちを受け入れる学校ということで、岩園小でも受け入れていたので、何が違うのか最初行ったときには分からなかった。僕も実際、岩園小でスペインから帰ってきた子、ドイツから帰ってきた子を自分のクラスにいれて、特に違和感はなかった。それが精道小に行ったとたん、帰国子女の担当の先生がいてはるし、戸惑いがありました。それがいつのまにか帰国子女教育から国際理解教育に名前が変わっていまして、国際理解教育とはここにもかいてあるとおり、「異質との共存」だろうなと思っています。

岩園小で、同和教育、解放教育ということで先輩の教師やらお父さんお母さんから、いろいろお話を聞いたり、ぼろくそにいわれながら、何となく自分のなかで育ってきたものがあって、それからしたら、国際理解教育とはどんなものか定義付けができてしまった。国際理解教育といったら、ただ外国のことを子どもたちに教える教育だということが、それがすべてみたいな感じを持ってる人たちがでてくる。またそれを望む保護者の方もいらっしゃる。そうなってくると、西欧文明が外国であって、東南アジアとか、お隣の国々は外国という位置づけをしないような、そういう受けとめ方がわれわれ教師を含めて大人の中にかなりあるようです。

僕なんか嫌いなんですが、悪いこととは思ってないが、学校の玄関に外国から帰ってきた子の、外国での写真が貼り出してある。

一方では、在日朝鮮人の子どもたちが精道小には何人か在籍している。そのなかで、若い先生が担任してはって、すごい頑張ってい

て、その先生からいろいろはなしを聞きます。

今年一年生に本名で学校にきている朝鮮人の子がいます。お姉ちゃんがいるんですけども、迷っていて、急に名前が変わっていくということで、すごく迷いがあって、いちばん上のお姉ちゃんは六年生で、中学校に入ったら本名に変えるんですが、下のお姉ちゃんは、まだどうしようかなという感じで、そういうところへ追い込んだというか、担任は保護者とつっこんだ話をしていって、それぞれの担任が連絡、意見交換をしながら話を進めているところです。そういう実態があるんですが、教師の意識の中にきちんと位置づけられていないというか、そういう中で「国際化」という、かなり矛盾はしているんですが、研究会がもたれようとしています。

先ほどちょっと集団登校の話が出たので、（笑い）（参加されていたお母さんから、ちょうど学校の先生がこられているので聞いてほしいということで、「集団登校を四分の一の子が負担に感じている。賛成している子も多いが、四分の一の子の意見も聞いてやってほしい」という意見が出されていた。）そのことについて少し。

いま障害児担当をしています。この前の教研集会ではクラスの担任の先生が報告しましたが、その子のほかにも障害児学級籍をとっている子がいまして、集団登校なしではやっていけない。確かに四分の一の子どもたちはひとりでも行ける子だと思う。集団登校は絶対しなければいけないという考えはないですが、自然発生的に隣近所が誘い合っていけるような、そんな地域の共同体が、都会ではずたずたになっている。そういう状況があると思うんです。

Aちゃんという女の子は言葉がなくて、自分の気持ちを相手に伝えるときに、ニコッと笑っているから大丈夫かなと思うと、うれしさを表現するのにつねったり、腹立ってくるとつねったりとか、いろんな形で出してくる。

いちばん僕が、まわりの子に感じるのは、Aちゃんと同じクラスにいたごんたな子が、二年でクラス替えで隣のクラスにいって、四月、そのクラスで、Aちゃんの話をして、Aちゃんは皆と同じようにはお話ができないというと、そのごんたな子が、「先生、Aちゃん目で話すんだよ」と言って、後はもう僕は言葉が続かなくて……。

つねられたり、髪の毛を引っ張られた子が、「Aちゃんがこんなふうに悔しくて、それで引っ張るんだよ」ということを言ってくれて、すごくうれしくて、このことが保護者のお母さんを力づけてくれたりして、どんどん外へ出て行って頑張ってくれていて、まだまだ芦屋の教育も捨てたもんじゃないよ。ということで期待をしています。

生徒の人格と生活を消し去った学校

市芦分会　塩谷裕子

今年は一年生に在日朝鮮人が二名、中国人が一名、二年生に在日朝鮮人が二名、三年生に中国人が一名います。そういう外国籍の生徒が、今でも市芦にたくさんいます。昔と、いわゆる「教育改革」以前と何がいちばん違うかというと、そういう外国籍の生徒達がいるということを、授業に行っている教師すら知らないという状況が今あります。

私が初めて市芦に来たのは、ちょうどチェさんが三年生の時で、もう本名を名乗っていて、朝文研もできていて、そういういきさつはまったく知らないですが、たった一人で作られたということです。人と人の関係ということをすごく言われていて、きっと一人で朝文研を作るに至るまでには、いろいろな人との関係で、市芦全体の、生き方とか自分のこれからの進路の見つけ方とか、そういうことを常に大事に問い続けてきた学校の雰囲気とか、そんななかで、きっと一人ででも朝鮮人としてこの朝文研を作って行こうということがあったと思う。

そういう意味では、今はまるで逆で、教師は授業に行って教えるだけで、その生徒がどんな生徒であって、どういうことをしようとしているとか、そんなこと全然関係なしに、授業だけを教える。英語だけ、数学だけを教えるという体制になっているから、信じられないと思うけども、子どもが在日朝鮮人であるとか、中国人であるとか、いう事は全然知らなくてよくて、むしろそういうことは授業を教える上でまったく必要でないという形で、全然知らされていない。

今、そういう状況で、外国人籍の子が合計六名いるわけですけど、誰もが本名を名乗っていない。だから、「国際化」というのは他国の人を尊重して、人と人のつきあいをしていく事だと思うけど、今の市芦はそういうことではなくて、そういう人と人のつきあい、外国の子に限らず、あらゆる生徒にとっても、とにかく教師と生徒との関係が教科を教えるだけになってしまっています。そういうなかで本名を名乗るとか、自分が在日朝鮮人だと宣言することとはほど遠い学校になってしまって、教師すら、生徒が外国籍であるという事を知らないまま、授業をその生徒に教えているという状態になっているのが今の市芦です。

芦屋市教委の「国際化」宣伝

市芦救援会事務局

今年の冬休みにもまた市芦高校の生徒がアメリカモンテベロ市へ「海外派遣」されるという。その「海外派遣参加者募集要項」なるものを最近見ることができたが、芦屋市教委の「国際化」認識の浅さ・歪みにとどまらない問題点を含んでいると思われるので、以下少し列挙してみよう。

まず、6. 対象者（資格者）の項には、市芦在学者、国際交流に意欲がある、初歩的な英会話ができるなどがあり、それはともかくとして、（4）海外生活に耐えられる心身を有する者というのがある。期間が二週間で、しかも冬休み、正月をはさんでおり、それが「耐える」というものかどうかは別として、ここでいう「心身」とは一体何か。百歩ゆずって、すぐホームシックにかかってメソメソするような頼りない生徒はダメ、という位であるなら話は別として、「身」では、例えば身体障害者は「不適格」とでもなるというのであろうか。先の「心」の話と同様、大したことではない、胃袋が丈夫であれば、という程度のことなら、わざわざ「海外生活に耐えられる心身を有する者」とことわることもなかろうと思うが、どうやら、「心身」の項目は、「心身障害者」お断わりのハラとみえる。

次に、7. 内容の（5）に、外地の自然・気候等に触れ、現地の農業やその他の産業についても学習する、とある。「外地」なる言いまわし方は、「国外の地」というニュアンスにとどまらない。ちなみに「広辞苑」では、「もと、わが国固有の領土を内地といったのに対して、それ以外の領有地、即ち朝鮮、台湾、樺太などの総称」とあった。ともかく、「広い国際的視野を生徒に養わさせる」という前に、市教委の役人に研修でもしてもらわねばなるまい。

更におどろいたのは、参加費として、全費用の約二五％（八万三千円程度）を個人負担とさせている点である。

たしか井上市芦学校長が、市内の中学校に進路の話でいった時、「市芦にくれば、海外留学もできます」などと、大宣伝をしていたと聞くが、「国際理解を深める」として大々的に宣伝する割には、せこいことをするものだ。約一年間分の授業料・諸会費分に相当する位の金額であろうし、公教育の中での親の負担を軽減してきたとりくみなど、どこ吹く風。「国際化」の正体みたり枯尾花、である。

「研修願」顛末記

市芦分会

十月二一日の開校記念日に先立つ一七日の朝、各教師の机上に「研修願」なる書類が置かれていた。我々はすぐに三年前のことを思い出した。市芦への弾圧が開始された三年前、深沢・河村両氏への不当な停職処分、鈴木氏への学年なかばでの強制配転処分に抗議する人波が市役所前を埋めた反弾圧集会の翌日がこの十月二一日だったのである。集会の決議文を持って市教委を訪れた教師・卒業生に、市教委は決議文すら受け取らないという、不誠実きわまる対応をした。そればかりでなく、怒りをこめてこれに抗議した教師たちに、翌日、「警告書」なるものが手渡された。それには「十月二一日は研修日である。あれでは研修したとは認められない」という主旨のことが書いてあった。開校記念日が「研修日」であるなどということは、我々にはまったくの初耳であり、管理職から一度たりともそのような話はなかったのである。

三年前にも不愉快な思いをさせられた我々であったが、今回の不愉快さはそれに輪をかけたものであった。いったい誰が書いたのか、文面は「（研修を）御許可下さいますようお願い申し上げます」という、なんとも大時代なものであった。自分を何様と思っているのだろう。まさに「支配と服従」を現場にもちこむものであったが故に、非組合員からも管理職に抗議が出たほどであった。上の者にこびへつらうという奴隷根性を持ちあわせた者のみが、こうした文書を己れにあわせて強要できるのである。

個別に研修をとるというのでもなく、夏休みのように長期にわたるものでもない。にもかかわらず「研修願」が先の様な文面で強要されたことで、あまりに教員を見下した校長の態度にたえかねた一人が、翌々日の朝会でその真意を質した。校長が「そんなことは前任校（川西緑台高校）でも行っていたことであるし、当然のことと思っていました」と答えた。

何かといえば「前任校」を持ち出し、市芦の実態・慣例など一切無視する校長に腹をたてていた教員からすかさず、「何でも県立高校なみと言うのなら、他の県立高校でも一人の教師が四科目も五科目も教えるのか！」と抗議すると、「それはそれ、ケースバイケースですよ」と居直る。その御都合主義的な理屈のたて方に一斉に抗議の声が飛ぶ。怒りの堰が切れたという感じであった。勤務条件の改善要求に対し、なんら誠意ある姿勢を見せないまま、このような形で慣例破りだけを行なってきたことには、誰もが不愉快な思いを感じている。

「研修願」提出拒否を貫ぬく

さらに翌日、八名で校長室を訪れた時にも、校長は朝会で述べたようなことを繰り返すばかりだった。「今まで行なわれていなかったのが不思議」という校長に、「今ごろこんなことをするほうが不思議だ」、「何か不都合があったのか」「教師の数が減らされて仕事ばかり増えている現状で、研修のことを考えるなら、試験日の午後の研修ぐらい認めたらどうや」「回復措置など厳密にやろか」など皆の怒りと要求がたたみかけられていった。

その勢いに押されて論拠を失なった校長から、「自分は当然のことと考えていた。慣例を無視するつもりはない。市教委が簡略化を認めるなら今までどおりでよい」との回答を得た。

八人は、必要を認められない研修願など絶対に提出しないこと、教員の研修権を校長の勝手な教員管理支配の道具には利用させないことを通告して引き揚げた。その後、校長は会員に対して承認研修として処理を行っている。

新校長が市教委のまったくの傀儡であることは、市芦の教員の誰もが知っていることである。市芦の教育の歴史をまるで知らず、また知ろうとせず、県立高校の管理面のみを強要する今回の愚行も、市教委の指示でなく校長独自の判断で行ったことの一つだが、市芦を腰掛けとして転出していく手段として、点数かせぎに行ったことだとすれば、我々の不快の念は高まる一方である。

しかし、押しつけの「研修願」を一応撤回させる形で、全員の承認研修にもちこませた

芦教組支部教研参加記

かけがえのない一人として育ちあうこと

市芦分会　大角進一

市芦において障害生が入学し卒業していくことが、生徒にとっても教師にとってもごく自然な風土として息づき始めた時、「教育改革」という名のもとに市芦の「障害児教育」が押しつぶされてしまった。

その無念さをかかえて、私は市芦への道を閉ざされた障害者と親が、決して高校への進学を諦めないということをきっかけに作られた「麦の家」に関わり始めた。それから一年半がたつ。

この時期、小中学校での障害児達はどのような学校生活を送っているのかが気になって、芦教組支部教研の障害児教育部会に出席した。そこで二つの実践報告を聞いた。

一つは山手小学校の障学児担当による報告、もう一つは精道小学校の担任の報告であった。

山手小の実践報告は、障害を持つ子供にとって地域の小学校に通学する大きな意味は「仲間（友達）を作る」ことにあると押えた上で、できるかぎり、クラスでみんなと授業を共にすることを追求したものである。

特に、私にとって興味深かったのは一斉授業である家庭科の授業の話であった。そこでは障害児と一緒に料理を作っている子供の生き生きとした作文が紹介されていた。障害児とともに学ぶことで、多くを学んでいくクラスの子の姿が証言されていたからである。

山手小学校の教育風土を感じさせるものでのは、日常的に労働強化を強いられることへの教員の怒りの自然な爆発であり、みんなの抗議行動の力である。理不尽なことには声をあげ、仕事をやりやすい職場づくりのため、一つ一つの闘いをていねいにすすめていくことの大切さをまた一つ学んだといえる。

興味深かった。

精道小の報告は、これまで全面普通学級での実践報告などほとんど聞く機会がなかった私にとって、まったく新鮮な感じがした。

「席に座ることなど、最初のうちは考えられなかった」というAちゃんの話である。気に入らないからといって髪を引っ張りつねる。また、気に入れば入ったで髪の毛を引っ張るAちゃんは、言葉がない分、自分の意思表示が髪を引っ張ったりつねったりすることだった。

そんな子を全面普通学級に位置づけていく。すごいなと思った。そこに踏み切っていく親と教師のよりどころは何なのだろうかと思った。

学年が変わってクラスが変わるとそのことが一つのパニックになる。

「学校から帰って来るといつも頭の先から足の先までどろどろ、そのうえ傷だらけ。Aが傷を作って帰って来る分、先生や友達も傷が多い。友達もAに対して体当りなのがよくわかる」とお母さんは語る。

芦教組支部教研障害児部会資料

親も子もみんなが体当り

そういう日々を何日も過ごす中から「Aちゃんがトントンと肩を叩いて自分の方に注意を向けたり、口に手を持っていって食べるまねをして『欲しい』と言うことを表したりするようになっていった」と、子供達のそんな関係が生き生きと語られていく。

もう一つ、とても印象に残る話があった。三年生の終わり頃のこと、クラスでゲームをすることがあった。その時少しいざこざがあって、負けたチームから「Aちゃんがいるから負けた」という子がでてきた。そのことをどう思うかクラスで話し合っていった時、一人の子が「僕も同じこと言われたことがある。とても悔しかった。Aちゃんも同じや」と自分のことを話していった。それにつれて何人かの子が自分の経験や気持ちをAちゃんと重ね合わせながら話していった。

自分の気持ち、思っていることを素直に出し合える関係、そのことがどんなにすばらしいことか。その時Aちゃんはクラスのかけがえのない一人に改めてなっていく。

「Aちゃんと何かしようとしてすんなりいかない時、子供達はどうしたらAちゃんが一緒にできるか手探りをしながら共に行動しようとしてきた」

そういう日々を一年間クラスの子がAちゃんと共に積み重ねてきたからだと思う。改めて子供達の共に育ち合う関係に驚かされた。

それと、助言者の先生の話がとてもよかった。「こんな文章を書けて（お母さんの詳しいレポートが資料としてある）、また、子供預けてテニスなどに行くという、こんな子供さんと親やったら担任してみたい」と切りだして、Aちゃんをめぐる家庭での日常生活にあれこれ話を及ぼしつつ、お母さんの気持ちをスーと引き取りながら「さまざまな過程を経て学校にたどり着いて来る、その話を聞き込むことで僕ら教師は気持ちが変わる。することもごっつう変わってしまうこともある」と話される。

常々思っていることを見事に位置づけてくれた思いがした。

集会は親を始めたくさんの人たちが参加して熱気溢れるものとなった。時間が十分なくて残念ではあったが、久しぶりに参加してよかったと実感できる集会であった。

引き続いて、基本的な障害児教育の在りようをめぐって、小中高の先生と親を交えた話し合いが続けられていって欲しいと思う。

Aが生まれてからも仕事をしたいと思っていました。Aは主人の母に預かってもらうつもりだったものですから、抱きぐせがついては迷惑がかかると思い泣いてもあまり抱いてやることはしませんでした。そうすると三ケ月たった頃からプッツリと泣かなくなり、いつもおとなしく一人で遊ぶようになりました。それをいいことに、なるだけほっておくようになりました。Aには「おばあちゃんを泣いて困らせないでね」なんて言って聞かせました。五ケ月から仕事に出ましたが私の願い通り、おばあちゃんにとってはとてもやりやすい子供だったそうです。ミルクを飲ませるとすぐに寝るし、ぐずぐず言わないで遊んでいたそうです。家に私が連れて帰って来てからは、私自身が家の仕事で忙しく、遊んでやる時間もなく五ケ月〜十ケ月が過ぎました。私がもっと家の仕事の手抜きをすれば良かったんですが、それができなくて、そのしわよせがAに云ったのです。そんな風に育ったので、あまり笑わない、表情の少ない子供でした。

仕事はAが一〇ケ月になった頃に止め、家にいることにしました。その頃には、もうすでにAの自傷行為の頭を床にゴンゴンするのは出ていました。その時は、自分の手を下においていましたので、いくら小児科で相談しても、「この子は知能犯だな」ですまされてしまいました。クビのすわり・寝返り・おすわりなど、だいたい標準でしたが、何故かハイハイが出来なく、つかまり立ちの方が先で、それも立った時、いつも右足だけ、つま先で立っていました。気にはなっていたのですが、「立ち初めは誰でもそうだ」と言う人の話を聞き、そうかなと思いつつ一才がきました。

一才検診の時、足のことで、先生にちゃんとした病院で診ていただく方が良いと言われ、兵庫医大病院に行きました。病院では尖足との診断でした。兵庫医科大の先生のお友達に、この病気についてとてもよく研究しておられる先生がいらっしゃるということで、日赤整肢学園を紹介され、行くことになりました。日赤の先生も同じ診断で、Aの場合は、日枢神経から来ているのではなく、部分的なものだからギブスだけで治るとのことでした。その時、先生がAの顔を見て、この子は一番大事な時期（五ケ月〜一〇ケ月）をでたらめに育てられていると、ひどく非難されました。ほとんどかまってやらなかったので当然のことです。頭のゴンゴンのことも話すと、赤ちゃんには指吸いなど色々クセがあり、Aの場合は最悪のクセだと言われました。一才過ぎた頃から、だんだんひどくなり、私は体罰で止めさせようとしたのです。でも、もっとひどくなるばかりでした。この時、Aは、とっても神経の細い子なので、そのことを私が早く知って、しっかりと受け止めてやれば今のような、情緒の不安定さはなかったと思います。ゴンゴンするAを見て、あまりの腹立たしさに、思わずたたいてしまい、そのことに対して自己嫌悪におち、泣きじゃくるAを抱き締めて、一緒に泣いたものです。

くたくたの毎日

二才半の時、これではだめだと思い、保健所相談に行き、子供病院を紹介してもらいました。病院で色々な検査をしてもらいましたが、一応、検査の結果、異常は認められず、先生の話で、まず一〇〇％Aの要求を聞いてやることから始まりました。一〇〇％の要求を聞いてやるということは、容易なことではありませんでした。三才から甲南女子大学の児童心理学研究所にかようことになり、遊びの様子を観察してもらうことになりました。この頃から排泄のしつけや三輪車の練習など、むきになってしたためか、私に対して反抗し、髪の毛は引っ張る、顔はかきむしる、の毎日が続きました。それは本当にひどいものでした。

妹が出来てからも、子供病院、甲南大学、尼崎生協病院など歩かない二人を抱いて通い、あまりの重さに、つらさに、何度となく投げだし、Aに「歩けるんだから、歩きなさい！」と、頭から怒鳴り、手をあげたりしました。だんだん心の余裕もなくなり、病院の先生から言われている言葉も忘れ、叱ることが多くなってきました。これではだめだと思い、自分自身に言い聞かせる為にカレンダーに、今日は一日、叱ったかどうか○×をつけていた時もありました。夜は何度も起きて泣くので睡眠不足にはなるし、お昼間は、キィキィばかり言って困らせ、もうくたくたの毎日でした。でも、少しでも良くなって欲しいという願いから、ヤマハ音楽教室に通ったり、いろいろ「良い」と言われることはやってみることにしました。

いい加減にしておけば良かったのに、私が何事に対しても、一生懸命するものだから、Aはしんどかったと思います。その時は私が一生懸命すればするほど、裏目裏目に出てしまいました。そんなふうなので、私がフッと気を抜いたとき、自転車がこげるようになり、排泄ができるようになり、少しずつ、できることが増えてきました。今も（Aが一年）学校の登下校をおんぶして通っています。いつか、自分から私の背中から降りて、歩いて行ってくれるようになるだろう、言葉も、いつか自然に出てくるだろう、それまでゆっくり待ってやろうなどと思うまでに、六年以上もかかってしまいました。私がこのように思えてきたせいか、この頃のA（一年の頃）は表情も豊かになり、親から離れて遊べるようになってきました。

幼稚園に入園した当初は反抗し続け、それはそれは大変なものでした。床に頭をゴンゴン擦る、噛みつく、髪の毛は引っ張る、つねるなど、ひどいものでした。先生に対する申し訳なさの毎日で、私自身卑屈になり、何度途中で、連れて帰ろうと思ったか知れません。入園して二ケ月経った頃、友人にテニスに誘われました。初めは、あんなに大変な子を預けて、遊ぶなんてすごく抵抗がありました。

（先生に申し訳ないと思ったのです）でも、申し訳ないと思いつつ、始め出すと、自分にも、好きなことが出来たという満足感から、少しずつ心にゆとりが出来、Aに対して、余裕を持って接してやれるようになりました。

年少の時、あんなにひどかったAも、先生方の努力で、だんだん良くなっていき、年長さんになった時は、他のお母さん方もびっくりするほど成長してくれました。

（それほど年少の時はひどかったんです）年長になってからも、春井先生の、ドンとした受け入れ方、東先生や他の先生のやさしい配慮のもとで、AはAなりに、どんどん成長してくれました。本当に幼稚園の先生方には言葉では言い尽くせないほど、心から感謝しております。

のびのびと学びあう

まず一番ビックリしたのが、Aがこんなにも早く授業中席に座っていることができるようになったことです。私としては学校に入学する前、これが一番心配でした。Aが教室の中を走り回ってクラスのお友達の勉強の妨げになるのが恐かったのです。担任をしていただく先生にはいつも、いつも申し訳なく思っております。親の私達でさえ、ムカッとすることの多いAです。思わず手が出そうになって、病院の先生にAは体罰は絶対にだめだと言われていることを思い出し、手をおろす毎日ですので、先生の並み大抵でない御努力に対しては、本当に有り難く思っております。今まで通り健常児の中で教育していただきたいと思っております。Aの場合、模倣が出来るのでお友達からの影響はとても大きいと思います。A自身沢山のお友達の中にいる時が一番楽しそうな顔をしています。また、Aがお友達から助けてもらうばかりでなく、子供達がAから何か学び取ってもらえれば、私自身救われる思いがします。

幼稚園の時の話ですが、貼り絵の時間にAが一生懸命に切っては貼り、切っては貼りしていると、飽きてしまった子供がAの方を見て、「あっ、Aちゃん、すごい頑張っている、ボクも頑張ろうっと」とまた一生懸命貼り出したという話を先生から聞きました。Aちゃんもあんなに頑張っているんだから、自分たちも、もっともっと頑張らねばと何人のかの子供が感じてくれたというこの話を聞いた時は、とても嬉しく思ったものでした。Aの場合、無理やり何かをさせようと思ったり、頭から押さえ付けようとするといつも逆効果になります。Aが学校でのびのび学ぶことができる状態になれば良いと思うのですが……。

今までいろいろ自分自身の中で波がありました。でも、周囲の暖かい人達の中で、じぶんの心の中にしまってしまわないで全部出してきたから、今の自分があると思っております。周囲の人達の暖かさ、小さな子供達のやさしいこと、何度となく感動しました。我が家にも子供達が沢山遊びにきてくれます。その中で子供達のほんの小さな心の動きなどがよくわかり、普通のお母様方より子供達の心を摑むことが出来ると思っています。Aにも小さな妹がいます。まだ小さいのに一杯我慢させています。妹にはAと私達両親を土台に大きく育って欲しいと思っております。

入学してあっと言う間に一年間が過ぎてしまった。クラス替えがあり、担任の先生も替わった。教室も一階から二階へと移り、Aにとって慣れるのに大変だろうと思っていた。朝学校へ行くのをとても嫌がり、着替えさせてドアの外に出すのは四苦八苦。何とかドアの外に出してしまえば、お隣の五年生のお姉ちゃんが、学校まで連れて行ってくれる。帰りは、今まで通り学校へ迎えに行く。やはり、私に甘えて歩こうとはしない。仕方なく。おんぶをして帰るという毎日が続いた。学校でAなりに我慢しているのか、家に帰ってからはとても機嫌が悪く、よくパニックを起こす。夜も相変わらず、ぐずぐず言って、朝まで眠ってくれることはない。学校でもずいぶん

と、お友達に悪いことをしているようだ。

この一年間にAにとって大きな出来事があった。火傷を負い、入院。初め、入院なんて出来ない子だと思っていた。随分、ひどい火傷だったので、初め、後ろに両手を縛られてしまった。それがこたえたのか、キズに触ることはなかった。意外なことでした。しかし、Aに何かあると、いつも批判されるのだが、この時は最高だった。

「何故、普通の学校に通わせているのだ。二才の子を学校にやっているのと同じだ」「何故、訓練に通わせないでほおっているのか」と、何もせずに、野放しにしているかの様に、随分言われてしまった。私にとっては、立ち上がれないくらいのダブルパンチだった。でも、時が経つにつれて、Aのことも、私の考えも少しずつわかってもらえてきた。結局、周りの人達は、無関心ではなく、Aのことを思って言ってくれている。先生方がすごく努力して下さっているのを見て、母親である私は、もっともっと頑張らねば、といつもファイトが出てくる毎日で、アッと言う間に一年が過ぎてしまった。

みんなが体当り

「もう中学年になってしまった」と思う気持ちが大きい。その上、またクラス替え。担任の先生まで替わってしまい、またまた、慣れるのに大変だろうと気持ちが沈んでしまう。今年、妹が入学した。妹と一緒に学校に行くと言うので、少しスムーズに家から出られる様になった。お隣のお姉ちゃんも六年生になり、Aの扱いはとても上手、お姉ちゃんに手を引かれ、サッサと学校へ行っている。それだけでもホッとする。学校から帰ってくるといつも頭の先から、足の先までドロドロ。その上、キズだらけで帰ってくる。Aがキズを作って帰って来る分だけ、先生やお友達もキズが多い。お友達もAに対して、体当りなのがよくわかる。

二学期頃からだったと思うが、Aなりにおしゃべり出来ない分、身体で表現出来るようになってきた。そうなると子供は、すごいもので、どんどんAを自分達の中に入れていってくれる。Aの表情も、随分変わってきたように思う。家に遊びに来てくれる子供達も増えてきた。三年生の後半になるとクラスの雰囲気がとても良いのが、子供たちの様子やAの様子でわかる。ある日、Aを学校まで迎えに行った時、私は校庭の隅でAを待っていた。クラスの子供達が何人かでドッヂボールをしていた。しばらくしてAが一人でランドセルを背負って出てきた。一人の男の子がAのそばまで来て、サッサとランドセルを降ろさせて、スッーと遊びの中に入れてくれた。Aが邪魔をしていても、誰も嫌がった風はなく、その行動がとっても自然で、わたしにとって、こんな嬉しいことはありませんでした。

願っていた通り、四年生はクラス替えもなく、先生も替わらなかった。Aにとって、こんなラッキーなことはない。でも、一つ残念なことは、お隣のお姉ちゃんが卒業してしまったことだ。私の心配通り、すごいパニックを起こし、学校へ行こうとしない。仕方なくお姉ちゃんに頼んで、Aと妹とお隣の三年生の子と一緒に登校班からはずれて、途中まで一緒に行ってもらうことにした。そうすると、また、機嫌良く家を出て行く。途中で、お姉ちゃんとバイバイしても、それからは妹たちと三人でスムーズに学校に行っているようだった。この状態が一学期間は続くだろうとおもっていたら、何のことはない、一〇日ほどでまた登校班と一緒に行けるようになった。でも、今でもお姉ちゃんは必ず「A行くよ！」と声をかけてくれる。その声で、Aは家を出ていく。今では、私が外に出て「行ってらっしゃい。バイバイ」と言うと、手を振りながら、皆と一緒に学校に行けるようになった。先日までのことが嘘のようだ。

パニックも少しずつ減ってきた。Aが出来ることも随分多くなってきた。四年生になって陸上クラブに入り、朝練の時など、同じクラブの子がAを家まで迎えにきてくれる。家の方に遊びに来てくれる回数も多くなってきた。先日も、男の子が二人遊びに来てくれた。その子たちが帰ると、Aは帰ったら嫌だと大きな声で泣く。すると、その子たちは、途中まで帰りながら、また引き返して来て、「A、泣くなよ」と声をかけてくれる。先生方、周りの子供たち、私達親子を囲んでいる周りの人達には、とても感謝をしています。

■第四回芦屋教育井戸端会議のご案内

とき　十二月二日〈土〉午後二時～四時半
ところ　芦屋市民センター　三〇三号

前回は、チェさんの話を聞けました。「一九九一年問題」といわれている在日朝鮮人の在留資格に関わる深刻な問題も話されました。日韓条約も条約締結の前後は、日本人の視野に入らぬ問題ではなかったのですが、強行され、既成事実化してしまうと随分鈍感になっていくものです。毎日の生活の裏側に歴史や政治のあれこれが張り付いていて、それを引き受けて日本で生きるチェさんらの姿があります。私達の側で引き受けねばならぬ歴史と政治があるのでしょう。

芦屋市内に在留する外国人の六割は朝鮮人です。私達と最も身近なところで暮しを共にしてきたし、共にしている外国人に対する当たり前の人間的つきあいができることが、「国際化」の掛け声に対する答えなのかも知れません。チェさんは、やはり日本の学校で朝鮮人の子供達を本名で呼んでほしい、と言う。「国際高校」の出発点はこのあまりにも当然な願いに答えることから始められるべきだ、ということでしょう。

会の翌日、大阪で行われた「生野民族文化祭」は一日中子どもから年寄りまでの哄笑に沸き返っていました。マダン劇『木綿のチマ・チョゴリ』には切ないほど日本に生きる朝鮮民族の意思と希望が込められていました。

今回は、「学区制問題」を取り上げます。子どもを持つ親や教員の大きな関心事ですが、進められようとしている学区制再編成の実態や事柄の持つ意味がもう一つはっきりしないまま、密かに既製事実化しようとしています。子どもにとって、学校にとってどんな影響や意味をもたらすものか、いろいろな立場から意見を出しあえればと考えています。中学校の高校問題担当委員の先生方にも出席していただく予定です。

「学区制問題」を一つの切り口として、芦屋の教育の歴史を見直すとともに、進行中の「教育改革」の姿も考えたいと思います。

お誘い合わせのうえ、出入り自由ですので気軽に井戸端の輪にお入りいただければうれしいかぎりです。ご案内申しあげます。

年末カンパのお願い

多くの方々のご支援の下、市芦反弾圧闘争も四年目に突入しました。きびしい「冬の時代」を元気にのりきっていかねばなりません。

公平委闘争も正念場をむかえ、「教育改革」反対闘争の地域のとりくみを強化し、連帯の輪の拡大の必要があります。今後とも救援会活動を充実させるべく年末カンパをよろしくお願い申し上げます。

活動日誌〈抜粋〉

10・15　芦屋市秋まつりに麦の家出店。
16～17　芦教組支部教研に参加。
20　国労連帯阪神がんこもんのつどいに参加。市芦校長、分会員の大衆的抗議の前に、開校記念日の「研修願」を事実上撤回。
28　第三回教育井戸端会議。
30　国労連帯芦屋の会に参加。
31　通信No.34発送。
11・4　麦の家秋まつり打上げ会に参加。
6　国労連帯芦屋の会に参加。
7　事務局会議。
8　法対会議。
11　同盟支部二十周年記念講演に参加。
12　国鉄フェスタに参加。
14　第二二回公開口頭審理。東灘解放研公平審傍聴参加。
15　分会会議。
16　対市教委諸要求書提出。